

## アラスカ 2008

場所：アラスカ州デナリ国立公園

期間：2008年4月5日～5月22日

メンバー：一村文隆(30,東京 YCC) 佐藤裕介(28,めっこ山岳会) 横山勝丘(29,信州大学  
学士山岳会)

4月5日、一村・佐藤・山田達郎・井上祐人の4人で日本を発ち、先にアラスカ入りしていた横山とアンカレジで合流する。山田・井上は全くの別チームであったが、普段は仲の良い友人同士であり、今回も買出しやカヒルトナ氷河での順応時に、一緒に行動して協力し合う事で話がまとまっていた。

4月7日、セスナでバックスキン氷河に入る。予定していたベアトゥース東壁は、2年前に一村と横山でトライしたものの、不安定な氷に阻まれて敗退した過去があった。今回氷河入りし、まず目にしたのは氷を寄せ付けない真っ黒な壁だった。壁を見ただけで諦めざるを得なかった。

天候は安定せず、気温も低かった。前半は何も出来ないまま氷河での生活をこなした。18日、ベアトゥース北東壁のど真ん中のラインにトライ。代替案としては存在感際立つこの壁は、未登である。



Climbing Is Believing の10ピッチ目を登る佐藤(M7R)。このピッチは技術的な核心。

Climbing Is Believing の10ピッチ目を登る佐藤(M7R)。このピッチは技術的な核心。イーストガリーを300m登り、北東壁に取付く。最初の300mの傾斜が非常に強く、部分的に人工登攀を用いて進んだ。氷は安定せず、非常に不安定な登攀となった。この日は中間部の雪壁まで。うまい具合にシュルンドを見つけられ、快適に夜を過ごした。

翌19日は上部壁。氷は上に行くほど良質になり、楽しんで登る事ができた。コンテを含めてイーストガリーから計18ピッチで山頂へ。山頂直下は雪庇の下を縫うようにして登る恐ろしげなピッチだった。山頂直下で、これまた素晴らしいビバークサイトを見つけ、快適に寝る。

翌日、ムースズトゥースとのコルまで行って、そこからイーストガリーを懸垂下降。午後それほど遅くない時間にはバックスキン氷河に降り立った。

このラインは非常にロジカルであるが、その傾斜の強さから今まで登られてこなかつ

たのだと思われる。基本的に、氷かクラックさえあればほぼどこでも登れるとの認識を持った。技術的にはアラスカ最難の一本と思われる。

### **Bear Tooth North East face first ascent “Climbing Is Believing”**

**Alaska Grade6: 5.10a, AI5, M7R, A1+ 1250m**

ベアトウスを登った翌日、セスナを呼んでカヒルトナ氷河に移動した。カヒルトナでの目標は、デナリでの継続登攀だったが、セスナから降りた瞬間に目の前にハンター北バットレスが見えた。今年の状態は非常によさそうで、これは見るだけではなくて登ってしまおうという事になった。

4月23日、ゴーアップ。今回、あくまでも本命の登攀ではなかったため、登攀は最大2日間までとし、荷物は極力減らした。3人でウェストポーチ2個のみ。総重量6kgの登攀は、肩周りがすっきりしている事もあって、登攀そのものを楽しむことが出来た。

2日目、最終ロックバンドを抜ける頃には天候が悪化してきたため、上まで抜けるのを諦めて下降。この日のうちにベースキャンプまで戻る。

全ピッチフリーで登る事が出来た。さすが超有名ルートだけあって、非常に内容が濃くて純粋にクライミングを堪能できた。また、我々に足りないものは何か、これから先何をすべきかを知る事が出来た。技術的な面では、おそらく世界でも上位の実力は持っていると思う。スピードもそこそこあるはずだ。問題は、それをひたすら続ける能力、つまり怒涛の体力がもっとも必要であると感じた。

### **Mt. Hunter North Buttress “Moonflower” Alaska Grade6: 5.8, AI6, M6**



Isis フェース中間部を登る (AI4+)。全てコンテで登っていたので非常に疲れた。

ハンターの後、デナリのウェストバットレスで順応を行なう。5月4日までの順応でデナリパス5600mまで行く。

その後天気予報が安定しないため、しばらく停滞を余儀なくされる。5月11日、半ば無理やりにセスナを呼び、ルース氷河のウェストフォークに入る。この日、そのままアプローチをこなし、アイシスフェースに取り付く。下部は雪壁が中心となる。顕著な雪のアレート下のシュルンドでビバーク。翌日は天候が安定しないため、停滞。

5月13日。上部壁を登り、サウスバットレスに出る。アイシスフェースは、予想

していたよりも簡単で、ルートを通してコンテで登る事が出来た。しかし予想に違わずラインは美しく、なぜ今まで2登しかされなかったのかが不思議に思えるほどだった。

この日のうちにランブルートの下降を始め、途中でテントを張る。

翌日、ランブルートを下まで下降、南壁基部まで行く。ランブルートは予想通りセラック崩壊の恐ろしいラインで、本山行中最も危険かつライン取りの難しい場所だった。

5月15日から南壁スロバクダイレクトの登攀を開始。傾斜の強い場所が随所に現れ、各ピッチのクライミングは非常に楽しかった。しかし、トータルの難しさでは南西壁のデナリダイヤモンドの方が難しいとの印象を持った。壁を抜けてカシンリッジにたどり付いたのは5月17日。翌日、リッジの残りを登り山頂に立った後、ウェストバットレス経由でベースキャンプまで戻る。計8日間の登攀だった。



スロバクダイレクト上部を登る一村 (M6)。この周辺は非常に傾斜が強い。

最初にこの計画を思いついた時、正直実現可能には思えなかったが、トレーニングを積んで最高のパートナーと組む事によって可能になった。こういう類の継続のアイデアは国内のパチンコや黒部横断から得たものである。日本のクライマーは、自信を持って国内の登攀に取り組むべきだと思う。これほど奥の深い登攀は世界中探してもかなり特殊だと思う。成功のキーワードは、「生活技術」と「忍耐」である。計5000m近く登攀をしたが、デナリ山頂直下で「もっと登っていたい」と思ったのも事実。ヒマラヤへのトレーニングであると同時に、新しい登山の概念を示せたのではないかと思っている。

**“Pachinko on the Denali” Isis face ~  
Slovak Direct link up  
Alaska Grade 7: 5.9, AI5+, M6+**

下山後、友人である山田と井上がカシンリッジで遭難した事が判明した。捜索協力、事務的な処理で帰国を2週間ほど延ばした。彼らを事故で失ったのは非常に辛いですが、彼らが成し遂げたデナリでの登攀—デナリ南稜の完全トレース—が白眉だと思う。彼らの情熱には最大限の賛辞を送りたい。